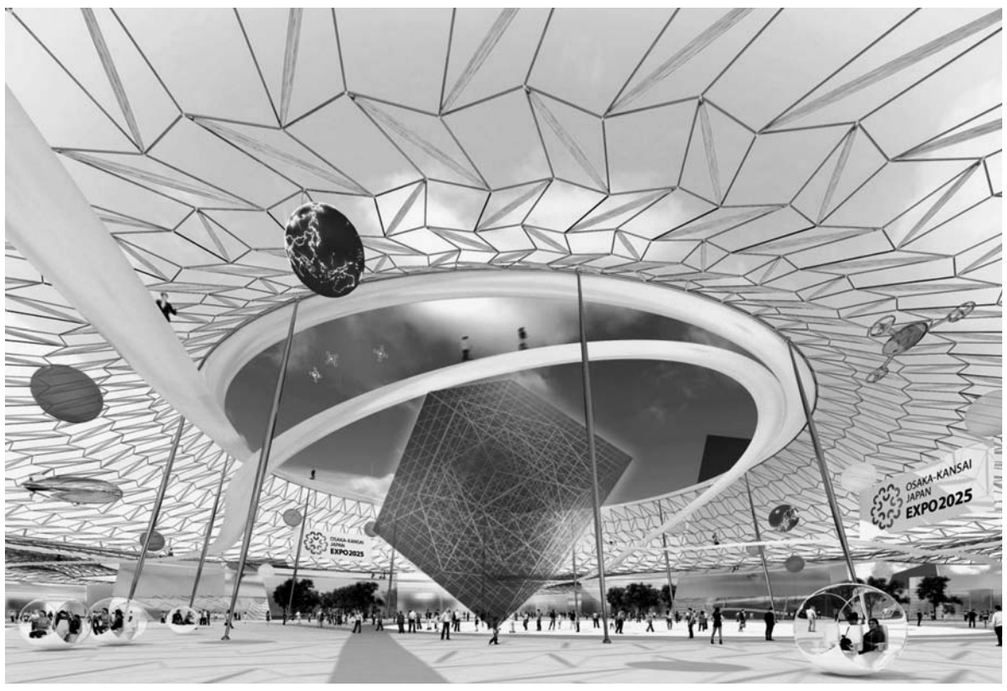
2025年大阪・関西万博　開催決まる

万博会場となる人工島・夢洲（完成イメージ）

夢洲に計画する万博予想図

関西から世界へ発信



会場５カ所に設置される大広場「空（くう）」（イメージ）

成功へ導く、オールジャパンの取り組み

２０２５年に大阪・関西で国際博覧会（万博）が開催される。世界3都市による厳しい誘致合戦を勝ち抜いた末の決定だけに、大阪・関西の喜びもひとしおだ。開催までの7年間は長いようで短い。成功を導き出すためには、オールジャパンでの取り組みが欠かせない。

25年万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」。〝いのち〟を前面に打ち出したコンセプトは、各国から高く評価された。万博というと、先端技術の展示の場というイメージがあるが、いのちという言葉には、科学技術による課題解決を超えた、社会や人類が直面する課題解決に取り組む場という意欲が示されている。

そのため、誘致活動にあたる官民の関係者は、国連が掲げる「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」を、万博開催の意義として訴えた。ＳＤＧｓには、貧困や飢餓の克服のほか、教育やイノベーションなど17のゴールが示されている。万博を単なるお祭りとせず、17のゴールを実現するための、壮大な社会実験の場としていく。

具体的な開催プランはこれからだが、プラン作りには、若者や中小企業の力が欠かせない。既に学生らによる万博のアイデアを持ち寄る組織「ＷＡＫＡＺＯ」が活動を進めているほか、テレビドラマ「下町ロケット」のロケ地として一躍脚光を浴びた精密バルブメーカーのフジキン（大阪市北区）が、万博での展示を検討するなど、さまざまな取り組みも始まっている。また、住友グループやパナソニックなど、関西にルーツを持つ企業も、これまでにないコンセプトでの参画に知恵を絞っている。

会場となる大阪湾の人工島「夢洲（ゆめしま）」は、一部が物流拠点として活用されているほかは、ほとんど手つかずの遊休地となっている。今後埋め立てによる造成や鉄道の敷設など、インフラ整備を急ピッチで進める必要がある。もちろん整備コストの負担など、課題は山積している。国、大阪府・大阪市を中心とする地方自治体、経済界が一丸となって、こうした課題を乗り越え、名実ともに夢のある地へと変貌させていかなければならない。

25年万博のレガシー（遺産）は、建物やインフラだけではなく、１００年、２００年後を生きる人類が、ＳＤＧｓに示された17のゴールを実現するターニングポイントの場となった、と言われるものになることを期待したい。

【開催概要】

▽テーマ　いのち輝く未来社会のデザイン
▽開催期間　２０２５年５月３日―11月３日（１８５日間）
▽会場　大阪市此花区の人工島「夢洲」（１５５㌶）
▽参加国　１５０カ国（見込み）
▽来場者数　約２８００万人（同）

住友電工
Connect with Innovation

世界がつながる。
世界が進む。
そこに、住友電工の技術。

よりエコでより安全・快適に、自動車をさらに進化。「自動車関連事業」
あらゆるネットワークインフラを構築。「情報通信関連事業」
電子製品を高性能・高機能化。「エレクトロニクス関連事業」
地球にやさしいエネルギーを安定供給。「環境エネルギー関連事業」
独自の材料技術で、生活と産業をサポート。「産業素材関連事業」

見えないところに、最先端の技術を。
住友電工は5つの事業で、
社会や暮らしの進化に貢献しています。

祝！ 2025 国際博覧会開催地
＼ 大阪・関西に決定！ ／
https://sei.co.jp

SUMITOMO
ELECTRIC
GROUP